

第5章

無目的な人間関係を必要としている人は誰か

データサイエンス学部 杉本実優

1. 問題の所在

近年、インターネットやSNSが爆発的に普及し、人間関係のあり方が変化してきた。何時でも何処からでもインターネット上の他者と繋がることのできる現代では、どうしても他者との関係が希薄化してしまう。内閣府「子供・若者の意識に関する調査（令和元年度）」によると、インターネット上での他者・コミュニティとの関わり方の【何でも悩みを相談できる人がいる】について全体で最も高いのは、「そう思わない」（53.8%）、「どちらかといえばそう思わない」（22.5%）と続く。やはり、インターネット上の他者との人間関係は現実世界での人間関係のように強い信頼関係ではなく、誰かと繋がり、孤独感を埋めるための無目的な人間関係であることが見て取れる。かつては、現実世界のみ深く狭いものであった人間関係が、インターネットを介しての希薄な関係も包含するようになり、人間関係のあり方が変化している。

現実世界での人間関係は深く狭いものであると前述したが、その要因として多くの人が現在の自身の安定した環境や人間関係を変化させることを嫌い、新たな行動を起こすことに恐れを感じてしまうことが挙げられる。人間は変化を好まず、新たな人間関係を構築するというリスクを取らずに現在の安定した人間関係の中で生活するほうが快適であり、狭い人間関係で固定的な活動をしている方が安全であると考えからだ。一宮・福盛・松下（2013）は対人コミュニケーションを、「傷つきの恐れ・同調と対立回避」「親しい人との（円満な）関係」「知らない人との関係・働きかけ」「人付き合いの消極性」の4つの視点から捉えられるとしている。これらの内の「傷つきの恐れ・同調と対立回避」「人付き合いの消極性」が人間関係を固定化する要因であると言える。しかしながら、現実世界で新たな人間関係を構築しようとせずに固定された狭い人間関係の中だけで活動していると他者の気持ちを押し量ることができず、他者の思考や心情に対して鈍感になってしまう。コミュニケーションの拡大に対して閉鎖的になると、連鎖して他者との関係を構築することが疎かになり、さらに新たな人間関係を構築することが困難となる。それを抑制するためには、自身の現在の人間関係を変化させることが有効となる。

以上を踏まえ、どのような人が現在の固定された関係だけでなく、新たに人間関係を構築したいと考えているかを明らかにする。中でも、近年新たに包含するようになった、誰かと繋がることで孤独感を埋めるための人間関係、つまり、強い信頼関係や利害関係、情報交換のためでなく、目的の無い人間関係を構築したいと考えている人にどのような特徴があるのかを明らかにする。第2節では先行研究を整理し、本稿で分析するための仮説を構築する。第3節では使用するデータと変数を概観し、第4節で分析結果を報告する。最

後に第5節で分析結果を基にした考察を行う。

2. 先行研究と仮説の検討

2-1. 先行研究

岡田（2008）は「親密な友人関係の形成・維持への動機付け」に焦点を当て、友人関係形成・維持モデルを提唱している。環境要因・個人要因が動機付けに影響し、結果として動機付けが友人関係行動、親密な友人関係の形成・維持に影響し、そこでの経験が動機付けに影響するという循環モデルとなっている。また、環境要因に関して、戸ヶ崎・坂野（1997）では母親の養育態度が及ぼす子どもの社会的スキルへの影響を検討しており、母親の養育態度が子どもの友人関係に影響することが発見された。大学生を対象とした崔・久永・竹澤（2017）の研究では、一人暮らしの学生はストレスを感じやすく、友人関係がストレス反応に影響を及ぼすことが明らかになった。

先行研究について、親密な人間関係の重要性を指摘するものや人間関係の維持に焦点を当てたものは多く見られたが、新しく無目的に人間関係を構築することについて焦点を当てたものは少なかった。岡田（2008）でも示されている通り、誰もが適応の支えとなる親密な友人関係を築いているわけではない。本稿では無目的な人間関係の構築欲求に影響を与える要因を明らかにすることを目的とする。

2-2. 仮説の検討

本稿では仮説を五つ検討する。

第一に、「一人暮らしの女性ほど無目的な人間関係を構築するニーズがある」という仮説を設定する。崔・久永・竹澤（2017）の先行研究により、一人暮らしの学生は、友人関係がストレス反応に影響を及ぼすことが明らかになったが、現在の固定的な友人関係にストレスを感じている人は新たな人間関係を無目的に構築したいという欲求を感じやすいのではないかと考えた。

第二に、「アルバイト・パートの女性ほど無目的な人間関係を構築するニーズがある」という仮説、第三に「収入が低い女性ほど無目的な人間関係を構築するニーズがある」という仮説を設定する。内閣官房孤独・孤立対策担当室の「人々のつながりに関する基礎調査（令和3年）」によると2020年における世帯年収（税・社会保険料込み）別にみると、孤独感が「しばしばある・常にある」と回答した人の割合は、年収100万円未満の人が7.3%で最も高くなっている。また、世帯年収が低いほど孤独感を感じやすい傾向にある。孤独感を感じやすい収入が低い人に加えて、低収入であるアルバイト・パートの人ほど無目的な人間関係を構築するニーズがあるのではないかと考えた。

第四に、「家族関係に満足していない女性ほど無目的な人間関係を構築するニーズがある」という仮説を設定する。戸ヶ崎・坂野（1997）の先行研究より、母親の養育態度が子どもの友人関係に影響することが発見された。先行研究で検討された「母親の養育態度」を包含した「家族関係への満足度の低さ」が無目的な人間関係の構築欲求にも影響するのではないかと考えた。

第五に、「年齢が低い女性ほど無目的な人間関係を構築するニーズがある」という仮説を設定する。落合・佐藤（1996）は、同性の友人とのつきあい方を「深いー浅い」「広いー狭い」の二軸の組み合わせから捉える質問紙によって調査し、①「浅く広い」②「浅く狭い」③「深く広い」④「深く狭い」つきあい方の4種類のうち、①「浅く広く関わるつきあい方」は、青年期の初めに多く見られた後は減少すること、逆に④「深く狭く関わろうとするつきあい方」は年齢を増すにつれて増加していくことを示している。本稿で扱う「無目的な人間関係」は「浅く広く関わるつきあい方」であるため、年齢の低い人ほど無目的な人間関係を構築するニーズがあるのではないかと考えた。

以上五つの仮説を、ロジスティック回帰分析で検証する。新たな人間関係の構築欲求に関する項目を目的変数として、説明変数には各仮説に対応する項目を設定する。

3. 使用するデータと変数

3-1. 使用するデータ

データには「コロナ禍における地域活動及び人間関係に関するアンケート」を使用する。調査の概要を表1に示す。このデータでは調査を彦根市在住の男女に限定しているものの、どのような目的で新しい友達を作りたいかを尋ねていること、本稿で仮説として設定し、説明変数となる同居人の人数、職業、世帯年収、家族関係への満足度、年齢を尋ねていることから仮説検証のために適切なデータである。なお、ニッセイ基礎研究所（2022）によると、コロナ禍において「孤独や孤立」への不安があるかどうかについて尋ねた結果、「非常に不安」と回答した人と「不安」と回答した人を合わせた不安層の割合は、男性全体では18.5%、女性全体では24.9%に上り、女性の方が孤独や孤立を不安に感じていることが明らかとなった。そこで、本稿では対象を女性の回答者に限定して分析を行う。

表1. 調査概要

調査名	コロナ禍における地域活動及び人間関係に関するアンケート
調査対象	滋賀県彦根市在住の男女
調査時期	2022年9月1日～9月21日
調査方法	Qualtricsを用いたインターネット調査
抽出方法	彦根市公式LineとQRコード付きチラシによる誘導
サンプルサイズ	1082

3-2. 使用する変数

全ての仮説に対して、従属変数には「新たに無目的な人間関係を構築したいか」を使用する。新たに人間関係を構築したいか否かを判別するため、問7「あなたは現在、新しい友達を作りたいと思いますか」という設問を使用する。「1. 作りたい」もしくは「2. どちらかといえば作りたい」を回答した人のみ新たに人間関係を構築する欲求があると考え、「3. どちらかといえば作りたくない」「4. 作りたくない」のいずれかを回答した人は新たに人間関係を構築する欲求がないと考え、「9. わからない」は欠損値とした。

また、新たに構築したい人間関係が無目的なものか否かを判別するため、新たに人間関係を構築する欲求がある人に対して、問 7-1「現在、あなたはどのような目的で新しい友達を作りたいと思いますか」の項目「A 何気ない話をするため」という設問を使用する。

「1. 強く思う」を回答した人を新たに無目的な人間関係を構築したい人とする。

次に、独立変数として、仮説 1 では問 12「現在、あなたと一緒に住んでいる方は、あなたを含めて全部で何人ですか」という設問を使用する。「1」と回答した人を一人暮らしとし、その他の有効値を回答した人を一人暮らしでないとする。

仮説 2 では、問 13「あなたの現在の就労状況（働いている場合その職種）は次のどれにあたりますか」という設問を使用する。解釈をしやすいするため、「1. 仕事をしていない」「2. 学生」「3. 専業主婦（主夫）」と回答した人を「無職・学生」、「4. 正社員・正職員（有期雇用契約含む）」「8. 会社などの役員・経営者」と回答した人を「正社員・経営者」、「5. アルバイト・パート」と回答した人を「アルバイト」、「6. 契約社員・嘱託」、「7. 派遣労働者」と回答した人を「契約・派遣」、「9. 自営業主（家族従事者含む）・個人事業主」、「10. その他」と回答した人を「自営・その他」とし、5つのカテゴリに統合した。

仮説 3 では、問 15「昨年度の世帯年収をお教えてください」という設問を使用する。解釈をしやすいするため「1. 100万円未満」「2. 100200万円未満」「3. 200～300万円未満」と回答した人を「300万円未満」、「4. 300～400万円未満」「5. 400～500万円未満」「6. 500～600万円未満」と回答した人を「300～600万円未満」、「7. 600～700万円未満」「8. 700～800万円未満」「9. 800～900万円未満」と回答した人を「600～900万円未満」、「10. 900～1000万円未満」「11. 1000万円以上」と回答した人を「900万円以上」、「12. わからない・答えたくない」と回答した人を「わからない」とし、5段階にカテゴリを統合した。

仮説 4 では、問 10「日ごろの生活で、あなたは以下のことをどれくらい感じていますか」の項目「D 家庭生活に対する満足」を使用する。「3. あまり感じていない」もしくは「4. 全く感じていない」を選択した人を家族関係に満足していない人と考える。また、「1. とても感じている」「2. あるていど感じている」を選択した人を家族関係に満足している人と考え、「9. わからない」を選択した人は欠損値とする。

仮説 5 では、問 2「あなたの年齢を教えてください」という設問を使用する。解釈をしやすいするため、30以下の有効値を回答した人を「30代以下」、39～49を回答した人を「40代」、50～59を回答した人を「50代」、60～69を回答した人を「60代」、70以上の有効値を回答した人を「70代以上」とし、5段階にカテゴリを統合した。表 2 に使用する変数の記述統計量について示す。この表によると新たに無目的な人間関係を構築したいと考えている人は 15.3%、したくないと考えている人は 84.7%と、新たに無目的な人間関係を構築したいと考えている人の方が大幅に少ないことがわかった。また、独立変数については一人暮らしの人が 7.6%、一人暮らしでない人が 92.4%と差が顕著にあることがわかった。

表 2. 使用する変数の記述統計量

変数	女性 (n=249)	
	Mean (%)	
従属変数		
新たに無目的な人間関係を構築したいか否か		
構築したい	15.3	
構築したくない	84.7	
独立変数		
一人暮らしか否か		
一人暮らし	7.6	
一人暮らしでない	92.4	
就労状況		
正社員・経営者	24.1	
契約・派遣	5.2	
自営・その他	8.0	
無職・学生	36.5	
アルバイト	26.1	
世帯年収		
300万円未満	21.3	
300~600万円未満	25.3	
600~900万円未満	20.9	
900万円以上	13.3	
わからない	19.3	
家族関係への満足度		
満足	69.9	
不満	30.1	
年齢		
30代以下	26.5	
40代	22.5	
50代	20.5	
60代	18.9	
70代以上	11.6	

4. 分析

4-1. 基礎的な分析

基礎的な集計として、各説明変数と新たに無目的な人間関係を構築したいか否かについてクロス集計を行った。まず初めに、一人暮らしか否かと新たに無目的な人間関係を構築したいか否かについてクロス集計を行ったものを図 1 に示す。この集計からは、一人暮らしの人の方が一人暮らしでない人よりもやや無目的な人間関係を構築したいと考えていることが読み取れる。クロス集計の結果、一人暮らしか否かによって新たに無目的な人間関係を構築したいか否かには統計的に差がないことが示された ($\chi^2=0.534$, $df=1$, $p=0.465$)。

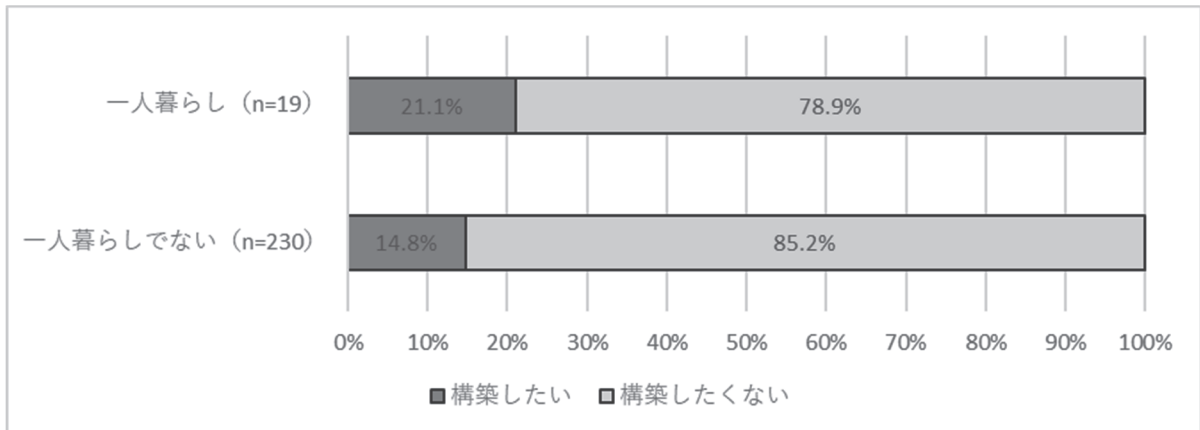


図 1. 一人暮らしか否かと新たに無目的な人間関係を構築したいか否かのクロス集計

次に、勤労状況と新たに無目的な人間関係を構築したいか否かについてクロス集計を行ったものを図 2 に示す。この集計からは、正社員・経営者が最も無目的な人間関係を構築したいと考えており、次いで自営・その他となっていることがわかる。また、契約・派遣は他の選択肢よりも無目的な人間関係の構築ニーズが低いことがわかる。クロス集計の結果、勤労状況によって新たに無目的な人間関係を構築したいか否かには統計的に差がないことが示された ($\chi^2=1.786$, $df=4$, $p=0.775$)。

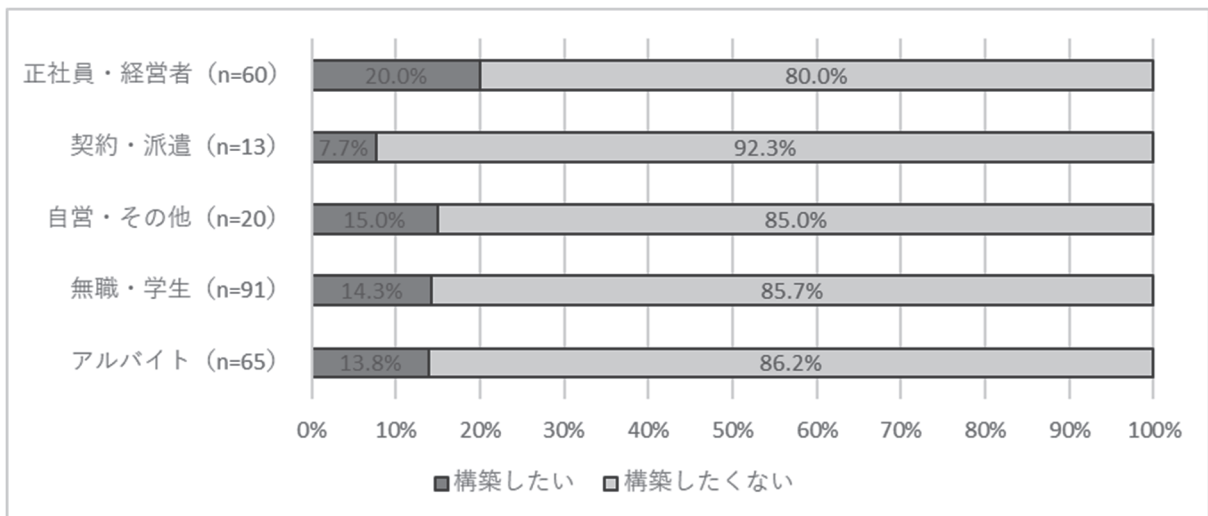


図 2. 勤労状況と新たに無目的な人間関係を構築したいか否かのクロス集計

次に、世帯年収と新たに無目的な人間関係を構築したいか否かについてクロス集計を行ったものを図 3 に示す。この集計からは、世帯年収が高いほど新たに無目的な人間関係を構築する欲求は高い傾向があることがわかる。構築したいと回答した人の割合が最も高かったのは 600～900 万円未満であり、次いで 900 万円以上となっている。クロス集計の結果、世帯年収によって新たに無目的な人間関係を構築したいか否かには統計的にやや差があることが示された ($\chi^2=8.001$, $df=4$, $p=0.092$)。

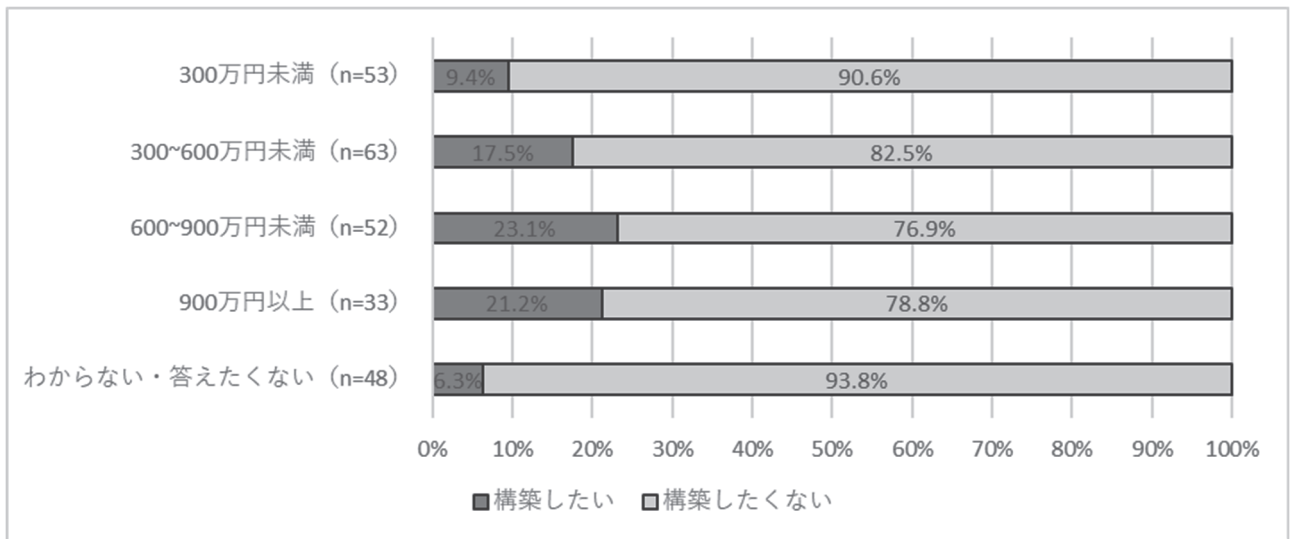


図3. 世帯年収と新たに無目的な人間関係を構築したいか否かのクロス集計

続いて、家族関係への満足度と新たに無目的な人間関係を構築したいか否かについてクロス集計を行ったものを図4に示す。この集計からは、家族関係に満足している人ほど新たに無目的な人間関係を構築したいと考えていることがわかる。クロス集計の結果、家族生活への満足度によって新たに無目的な人間関係を構築したいか否かには統計的に差がないことが示された ($\chi^2=0.883$, $df=1$, $p=0.347$)。

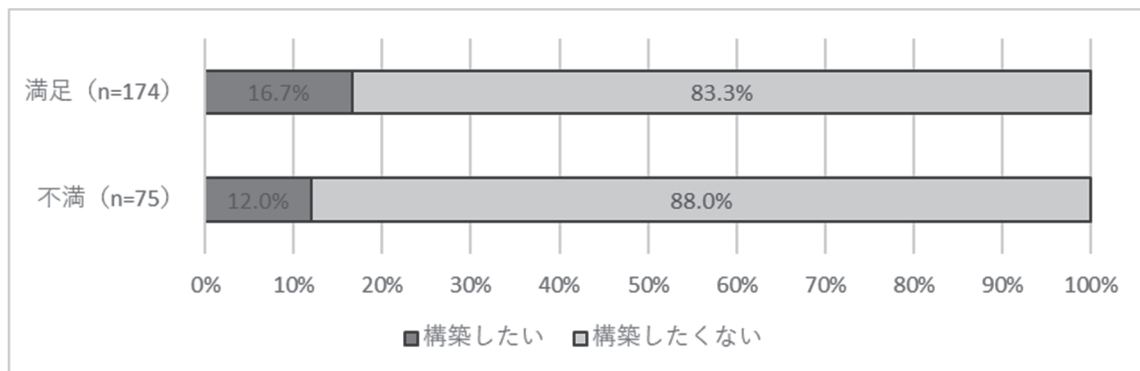


図4. 家族関係への満足度と新たに無目的な人間関係を構築したいか否かのクロス集計

最後に、年齢と新たに無目的な人間関係を構築したいか否かについてクロス集計を行ったものを図5に示す。この集計からは、年齢が若い人ほど新たに無目的な人間関係を構築したいと考えていることがわかる。構築したいと考えている割合が最も高いのは30代以下となっており、次いで40代、50代と年齢が若い順に続く。クロス集計の結果、年齢によって新たに無目的な人間関係を構築したいか否かには統計的に差があることが示された ($\chi^2=11.182$, $df=4$, $p=0.025$)。

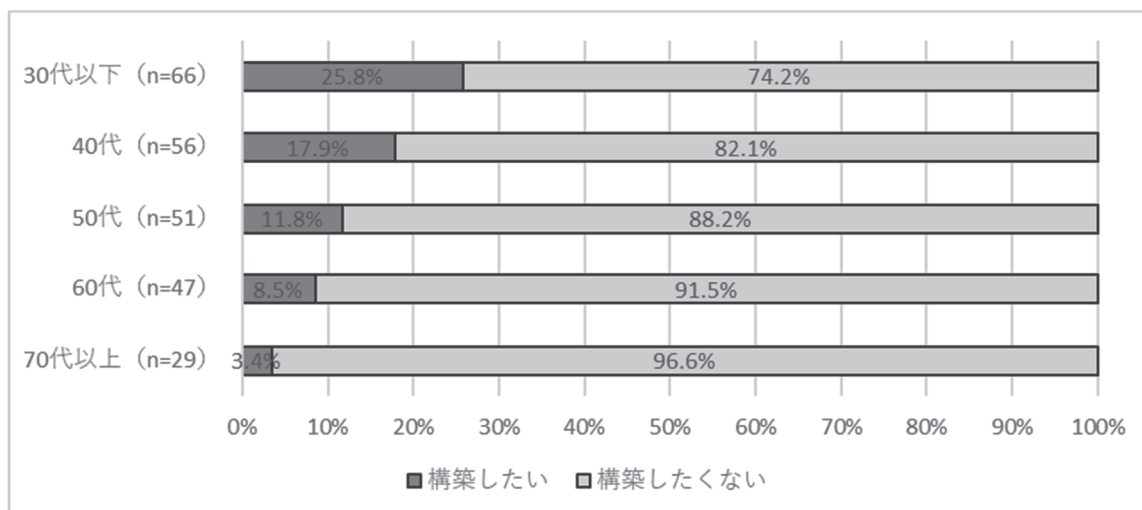


図5. 家族関係への満足度と新たに無目的な人間関係を構築したいか否かのクロス集計

以上5つの単純集計を踏まえて、次節ではロジスティック回帰を用いた多変量解析を行う。

4-2. 多変量解析

本節では、どのような変数が「新たに無目的な人間関係を構築したいか」に影響を与えているのかをロジスティック回帰を用いた多変量解析によって検討する。表3は新たに無目的な人間関係を構築したいかを目的変数とし、仮説に使用した変数を説明変数としたロジスティック回帰の分析結果である。

表3. ロジスティック回帰の分析結果

	B	標準誤差	Exp(B)	
(定数)	-5.583	1.620	0.004	
一人暮らし	1.302	0.705	3.678	+
アルバイト・パート	0.216	0.471	1.241	
家族生活の満足度	0.707	0.304	2.029	*
年齢				
30代以下	2.535	1.113	12.611	*
40代	2.095	1.134	8.129	+
50代	1.706	1.174	5.507	
60代	1.037	1.173	2.820	
70代以上(ref.)				
収入				
300万円未満	-0.467	0.705	0.627	
300~600万円未満	0.011	0.593	1.011	
600~900万円未満	0.263	0.570	1.301	
わからない・答えたくない	-1.458	0.754	0.233	
900万円以上(ref.)				
n		249		
Nagalkerke R2		0.099		
Cox and Snell R2		0.173		

Note +: p<0.1, *: p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001

表3を見ると、家族生活への満足度、年齢、一人暮らしであることが統計的に有意となることがわかった。クロス集計で確認した通り、年齢が若い人ほど新たに無目的な人間関係を構築したいと考えていることがわかった。この結果を踏まえて次節では考察を行う。

5. 考察

本稿では、どのような要因が新たに無目的な人間関係を構築することに影響を及ぼすかをロジスティック回帰で分析した。統計的に有意となったのは家族生活への満足度、年齢、一人暮らしであることであった。この3点において考察を行う。

まず家族生活に満足している人ほど新たに無目的な人間関係を構築したいと考えていることがわかった。家族生活に満足していることで新たに他の人間関係を構築することに対しての恐れがなくなっているため、無目的な人間関係の構築欲求が高まっていることが考えられる。

次に、年齢が若い人も有意で新たに人間関係を構築したいと考えていることがわかった。落合・佐藤（1996）で述べられていた通り、年齢が若い人ほど「浅く広く関わる付き合い方」が主流となっており、無目的な人間関係の構築に積極的なのではないだろうか。

また、一人暮らしの人も無目的な人間関係を構築したいと考えていることがわかった。これは、孤独感が関係しているのではないかと考えた。一人暮らしによる孤独感から新たに無目的な人間関係を構築したいと考えるのではないだろうか。

最後に、残された課題について二点指摘する。まず一点目は、若年層への調査が不十分であることである。今回の多変量解析では各変数の欠損値を除去、女性のみ分析対象を制限しているため、 $n=249$ と非常に小さい値になってしまった。また、今回の分析では若年層のサンプルサイズが非常に小さくなってしまったので、さらに調査を行い、若年層における無目的な人間関係の構築欲求についても明らかにしたい。二点目は、使用したデータの制約である。今回は彦根市のデータを使用したため、今回の分析結果は彦根市のみの限定的な結果である可能性がある。調査対象を日本全国に広げることによって、新たな結果が得られ、日本全体について議論できるのではないだろうか。

6. むすび

本稿では、彦根市の調査を用いて、どのような人が無目的に人間関係を構築したいと考えているのかをロジスティック回帰で明らかにした。統計的に有意となったのは家族生活への満足度、年齢、一人暮らしであることであった。これらから、新たに無目的な人間関係を構築したいと考える要因として、恐怖心のなさや孤独感が影響していると考えた。第1節では人間関係の固定化が問題であると指摘したが、これを拡大化するためには、人々の人間関係を構築することに対する恐怖心を取り除くことが望まれる。また、孤独感を感じている人を対象として新たな人間関係の構築を促進する場を作るなど、無目的な人間関係を必要としている人がそれに応じて自由に人間関係を構築することができるような環境があると、私たちはより人間関係の構築に対して寛容になるのではないだろうか。

参考文献

- 内閣府政策統括官（強制社会政策担当），2020，『子供・若者の意識に関する調査（令和元年度）』（<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r01/pdf-index.html>）。
- 一宮 厚・福盛英明・松下智子，2013，「大学生を対象とした対人コミュニケーション尺度の開発：信頼性と妥当性」『健康科学』 35:9-15.
- 岡田涼，2008，「親密な友人関係の形成・維持過程の動機づけモデルの構築」『教育心理学研究』 56(4):575-588.
- 戸ヶ崎 泰子・坂野 雄二，1997，「母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響--積極的拒否型の養育態度の観点から」『教育心理学研究』 45(2):173-182.
- 崔玉芬・久永哲雄・竹澤 稔裕，2017，「友人関係，睡眠状況，学業状況が大学生のメンタルヘルスに及ぼす影響-部活，朝食摂取，一人暮らしによる検討-」『関東学園大学紀要』 25:1-14.
- 内閣官房孤独・孤立対策担当室，2022，『人々のつながりに関する基礎調査（令和3年）』（https://www.cas.go.jp/jp/seisaku/juten_keikaku/dai4/sankou2.pdf）。
- 落合良行・佐藤有耕，1996，「青年期における友達とのつきあい方の発達的变化」『教育心理学研究』 44, 55-65.
- ニッセイ基礎研究所，2022，『コロナ禍でどんな人が孤独・孤立を感じているのか～「第8回 新型コロナによる暮らしの変化に関する調査」より』（<https://www.nli-research.co.jp/report/detail/id=71252?pno=2&site=nli>）。